

平成26年 4月11日

公益財団法人 笹川記念保健協力財団

理事長 喜多悦子 殿

施設名

福岡県糟屋郡志免町別府西 3-8-15

社会医療法人 栄光会 栄光病院

代表者

理事長 下稲葉 康之



2013年度ホスピス緩和ケアドクター研修助成
に係る報告書の提出について

標記について、下記のとおり報告いたします。

記

1 研究・研修事業 2013年度 ホスピス緩和ケアドクター研修助成事業

2 期 間 2013年 4月 1日 ～ 2014年 3月 31日

3 報 告 書 I 事業の目的・方法

II 内容・実施経過

III 成果

※ 上記 I. ～ III. については別紙参照下さい

IV 収支報告

① 助成金の使途

② 当該助成金に関わる部分の決算書「写」

(②につきましては、2014年 6月 9日を目途に
提出いたします)

V 今野俊和 Dr. 作成

「2013年度ホスピス緩和ケアドクター研修 完了報告②」

以上

I. 事業の目的・方法

1) 目的

ホスピス・緩和ケア医療に対する国民の理解・認知度は一頃に比べると大分進んできたのは事実であり、それに伴いホスピス・緩和ケア病棟を持つ施設も相当増えてきた(2013年11月現在で295施設-5880床)。ただホスピス・緩和ケアに対する認知度・期待が増大している割にはこれらに関心のある医療従事者は多くない。とりわけ熟練ドクターの不足は深刻である。一般病院・一般病棟においても緩和ケアチームを設置するところが散見されるようになったが、全般的にターミナルケアに対する認識・取り組み・経験が未成熟であると云わざるを得ない。それ故に今なおホスピス・緩和ケアにマインドを持つドクターの育成が不可欠である。

したがって、

- ① ホスピス・緩和ケア病棟に関心のあるドクターに対する専門教育
- ② ホスピス・緩和ケアの教育体制の確立と充実
- ③ 一般病院・病棟におけるターミナルケアに関する意識の向上
- ④ 一般病院・病棟における緩和ケア体制の充実
- ⑤ 在宅ターミナルケアに対する意識の向上と体制の充実

を、目指すことを目的として、ホスピスドクターの研究・研修活動を実施する。

2) 方法

- ① 笹川記念保健協力財団に申請し指定されたドクターに対し、指定された期間に実習を実施する。
- ② 研修担当者による打ち合わせ

- ・スケジュールについて
- ・講義内容及び担当について
- ・実習内容及び担当について
- ・院内刊行物等関連資料の提供

「いのちの質を求めて」「幸福な死を迎えたい」(何れもいのちのことば社刊)等

栄光病院理事長(名誉ホスピス長) 執筆図書

「手と目と」(病院機関誌)「栄光ホスピトラ」(NPO法人栄光ホスピスセンター機関紙) 等

③ 研修開始

- ・講義及び実習の進行状況把握、調整
- ・研修の目的が達成できているか、毎週金曜日に懇談会を持ち確認を行い修正する。

Ⅱ. 研究・研修内容、実施経過

1) 研究・研修計画及び内容

期 間	講 義 及 び 実 習
4 月	(講義) ① ホスピスケアの精神と医療・看護のあり方 理事長 下稲葉 康之(名誉ホスピス長) ② ホスピスドクターの理念と役割 ホスピス主監 吉田 晋 ③ ホスピスの歴史と今後 ホスピス長 下稲葉 順一 (実習) ホスピス医について患者・家族へのケアの実際を学ぶ
5 月 ～ 6 月	(講義) ① コミュニケーションの取り方 ホスピス長 下稲葉 順一 ② “ ” チャプレン 清田 直人 (実習) 回診におけるコミュニケーションの実際
7 月 ～ 9 月	(講義) ペインコントロール及びその他の症状コントロール ホスピス主監 吉田 晋 【反省検討会】半年間をふりかえって 講義・実習に対する質疑・検討 名誉ホスピス長 下稲葉 康之、ホスピス主監 吉田 晋、ホスピス長 下稲葉 順一により (実習) 症状コントロールの実際 ※ 追悼記念会 出席 (2 回/年 秋・春 秋分・春分頃実施)
10 月 ～ 11 月	(講義) ① チームケア 看護部長 中島 長子 ② 霊的ケア チャプレン 清田 直人 ③ 医療相談とホスピス利用 医療福祉相談室室長 的野 修一 (実習) チームにおけるそれぞれの役割とその実際
12 月 ～ 1 月	(講義) ホスピスにおけるインフォームドコンセント 理事長 下稲葉 康之(名誉ホスピス長) (実習) インフォームド・コンセントの実際
2 月	(講義) ① 社会的ケア (家族・遺族へのケア) 栄光病院院長 青戸 雄司 ② 在宅ケア 訪問看護ステーション責任者 関 泰子 在宅医療センタ - Dr. 中尾 美也子 (実習) 外来・往診・在宅ケア見学
3 月	(講義) ボランティアの役割とトレーニング 看護部長 中島 長子 【反省検討会】1年間をふりかえって 講義・実習に対する質疑・検討 名誉ホスピス長 下稲葉 康之、ホスピス主監 吉田 晋、ホスピス長 下稲葉 順一により (実習) ボランティア活動への参加 ※ 追悼記念会 出席 (2 回/年 秋・春 秋分・春分頃実施)

(上記 敬称 略)

- (注) *
- 講義は各セッションの早い時期に実施し、引き続いて、実習に入るものとする。
 - 実習は先任ホスピス医(吉田 Dr.、下稲葉(順)Dr.)がマンツーマンで指導する。
 - 月・木 8:00～ ホスピス医カンファレンスには毎回参加する。
 - 職員朝礼 月・水・金 8:30 及び緩和ケア病棟申し送りには毎回参加する。
 - 月曜日午後 ホスピス総回診、木曜日午後ホスピスカンファレンスに参加 する。
 - 葬儀・前夜式(通夜)・納棺式がある場合は極力参加する。

2) 実施経過

1) ホスピスドクター研究・研修計画に基き実施

① オリエンテーション

- 研修全期間のスケジュール・内容
- 研修期間中の心得

② 病棟におけるオリエンテーション

- 病棟の構造
- 一日の流れ（日勤・夜勤）
- 研究・研修体制、担当者の紹介
- 患者紹介

③ 講義・実習の開始

- ホスピス専従医師(吉田 Dr.、下稲葉(順)Dr.)を中心にマンツーマン方式により実践

④ 進行状況をチェックし、講師及びホスピス専従医師と時間調整を行う。

⑤ 毎週末に、懇談会を行い効果的な講義・実習になるように調整・修正する。

2) 評価

① 研修生と担当者・関係者と懇談

- 研修全体について、評価・反省・感想を尋ね
- 目的が達成されたかを確認

② 研修レポートの提出を要請

③ レポートの内容と実習状況より評価を行う。

3) 修了・反省会

※本来は年度末に懇談会を開催し、研修生及び講師陣が集い、1 年間の研修の成果・反省等を話合った。研修生本人からは本年度得た知識と経験を持って より一層 患者さんやご家族の心に寄り添ったホスピス医の働きをしていきたいとの申し出があり、引き続き当病院 - ホスピス病棟での勤務を続けていただくことになった。

Ⅲ 成果

ホスピスドクター研究・研修は2003年度・2009年度・2012年度に続き4回目の実施となった。本研修生は 今までの研修生の中では最も医師としての経験の長い先生であり却って過去の経験が障害となってホスピス医としての知識・ノウハウ・スキルの習得の進捗を阻むこともあろうかと懸念されたが、そういったこともなく精力的に学ばれたように思われる。

1. 講義関連の成果

ホスピス精神に関連する講義から始まり、ペインコントロールなど実務に直結する講義など、基本的にはスムーズに進んだ。名譽ホスピス長(理事長)・チャプレン等の講義が即 臨床現場においても思い当たる節が多く実践に役立てることも多々あったようであるが、そう一筋縄ではいかずターミナルケアの対象と深さについて更に認識を深められたようである。

2. 実習関連の成果

① ペインコントロール・インフォームドコンセントに関して

期間を通じて主治医として合計96名(月当たり15~21名)のホスピス入院患者及びその家族と関わった。外科医としての経験とはまた違うペインコントロールやホスピス独特のインフォームドコンセントなどは、患者さんやご家族それぞれがケースバイケースで異なる処置あるいは対応が必要であり実習を通さないと体得できないホスピスケアの難しさを痛感し学ぶ場となった。

② チーム医療・コミュニケーションをとることの重要性習得 - に関して

期間を通して多職種協働でのチーム医療・また職種間で確りした密接なコミュニケーションをとった上での患者さんへの医療を進めていくことの重要性を学ぶ場となった。投薬一つとってもスタッフの意見を十分に踏まえた上での対応をするという繊細さを身に付けられたようである。また、患者さんには主治医に加え担当 Nrs. が付き、基本的にこの2人がペアになって医療に当たる事になっているが、あるデスカンファレンスの際 ペアを組んだ Nrs. が早朝から夜遅くまでそれこそ献身的に患者さんのケアを行ったことに対し『一生懸命頑張る姿に感動し、身体を壊しはしないか心配していた』とのねぎらいの声をかけるなど、スタッフへの心遣いを示したエピソードも印象的である。

③ 患者さんやご家族とのコミュニケーション・信頼関係の確立

研修生が外科医出身であるだけにまさにこの点が自身の経験と比して勝手が違う点であったようだが、心を籠めて取組まれた。家族会議も熱心さの余り2時間を超えることも頻回であったし、亡くなった患者さんの納棺の際 悲嘆にくれて号泣するご家族(ご遺族)にそっと近付き その方に自身のハンカチを差し出し 肩を抱かれていた等という、寄り添う姿勢を示されたという一コマもあった。

④ 在宅ホスピスケアに関して

当病院では2009年度に当事業の研修生であった中尾美也子 Dr. が在宅ホスピスケアの専従医をしている。今回の研修生も在宅ホスピスに対するマインドは高いものの 先述の中尾 Dr. との役割分担の要素が強く、病院では本研修生が 在宅では中尾 Dr. が という体制となり 講義・カンファレンスや連携と云う意味ではとにかく 本来的な意味での在宅ホスピスケアへの関わりは充分厚いものではなかった。次年度に向けた取り組み課題と云えよう。

3. その他の成果

研修期間中には、病棟カンファレンスにおいて研修生が積極的に発言したほか、栄光会等主催の各種ホスピス研修会に参画するなど、研修生本人の自発性・積極性を引き出す意義深い場となった。